

## 土師南方遺跡 若松西二丁目

9月28日～10月16日 個人住宅建築に伴う緊急調査

試掘調査の結果から、古墳時代の竪穴住居との想定で調査を行いました。しかし、遺構を掘り下げてみると粘質土が詰まった約2m×6.5mの方形土坑が3基並列したものでした。その性格として、今のところ砂質の土壌のうえに建物を建てるための基礎地業（地盤改良）の跡ではないかと解釈しています。埋土からは古墳時代前期から鎌倉時代にわたるさまざまな遺物が破片となって出土しました。これらの遺物は付近の低地の包含層から粘質の土を採取した際に持ち込まれたものでしょう。この土坑を切り込む攪乱穴から近世瓦や石硯が出土し、年代の下限は江戸期ということになります。



調査区全景（北から）

## 伊勢国府跡（長者屋敷遺跡第33次） 広瀬町

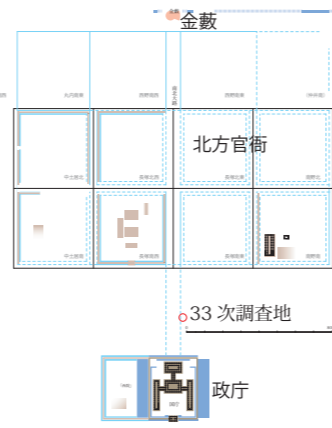
1月5日～3月4日 学術調査

長者屋敷遺跡の奈良時代の伊勢国府政庁の北方には一辺約120mの方格地割が施され、礎石瓦葺建物が建ち並び官衙（役所）域であったと考えられています。

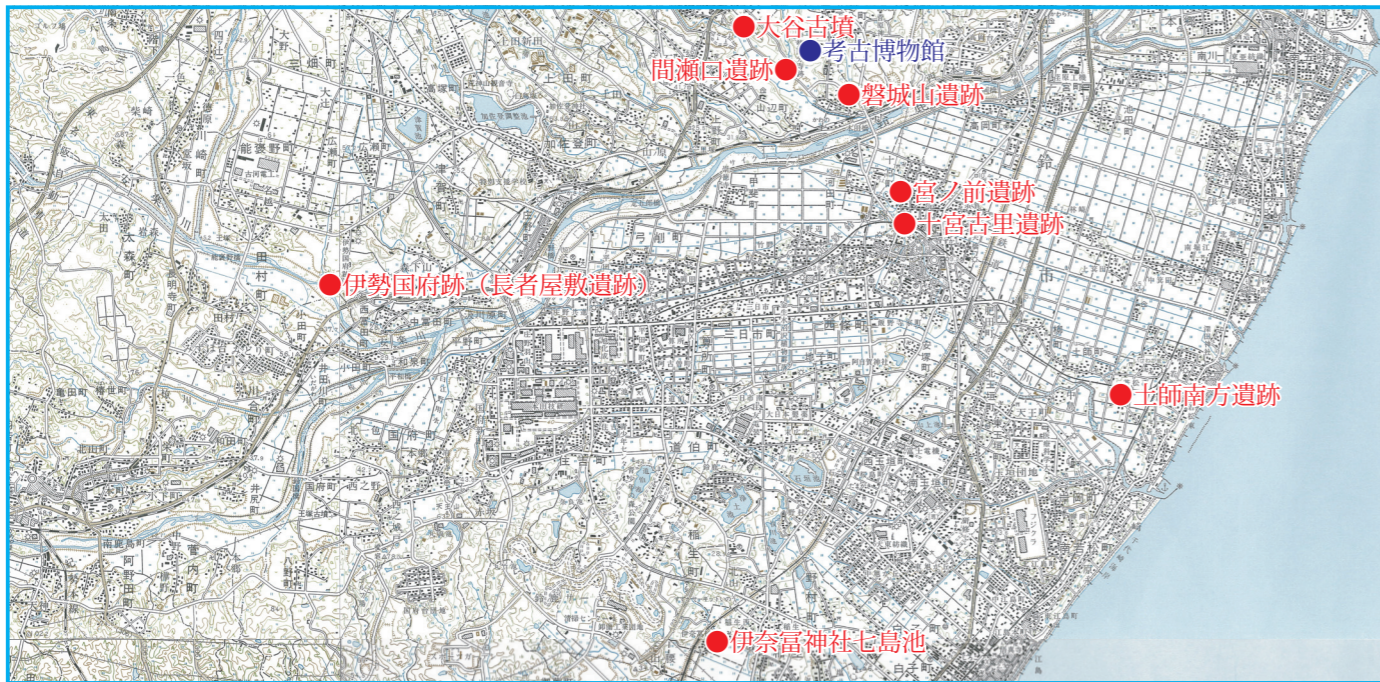
今回は、政庁はこの方格地割の中間点に調査区を設けました。方格地割中央には幅24mの朱雀大路にあたる道路の存在が確認されています。その道路が政庁まで繋がるか否かを確認するのが目的でした。東側溝の想定ラインに調査区を設定しましたが遺構は見つかりませんでした。遺構が無いことを確認できたことも調査のひとつの成果です。



調査区と政庁跡の林（北から）



調査区位置図（1/12,500）



発掘調査遺跡位置図（1:100,000）

この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図「亀山」「四日市」「津西部」「津東部」を使用したものである。

### 関連講演（解説：当館職員）

発掘担当者による展示解説（考古博物館特別展示室）4月16日（土）13時半～

スライド説明会（考古博物館講堂）

5月21日（土）14時～「伊奈富神社七島池第1次、十宮古里遺跡第5次」

6月12日（日）14時～「間瀬口遺跡第1次、磐城山遺跡第7-2次・8次、宮ノ前遺跡第4次」



## 鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 鈴鹿市国分町224番地 TEL059-374-1994 FAX059-374-0986

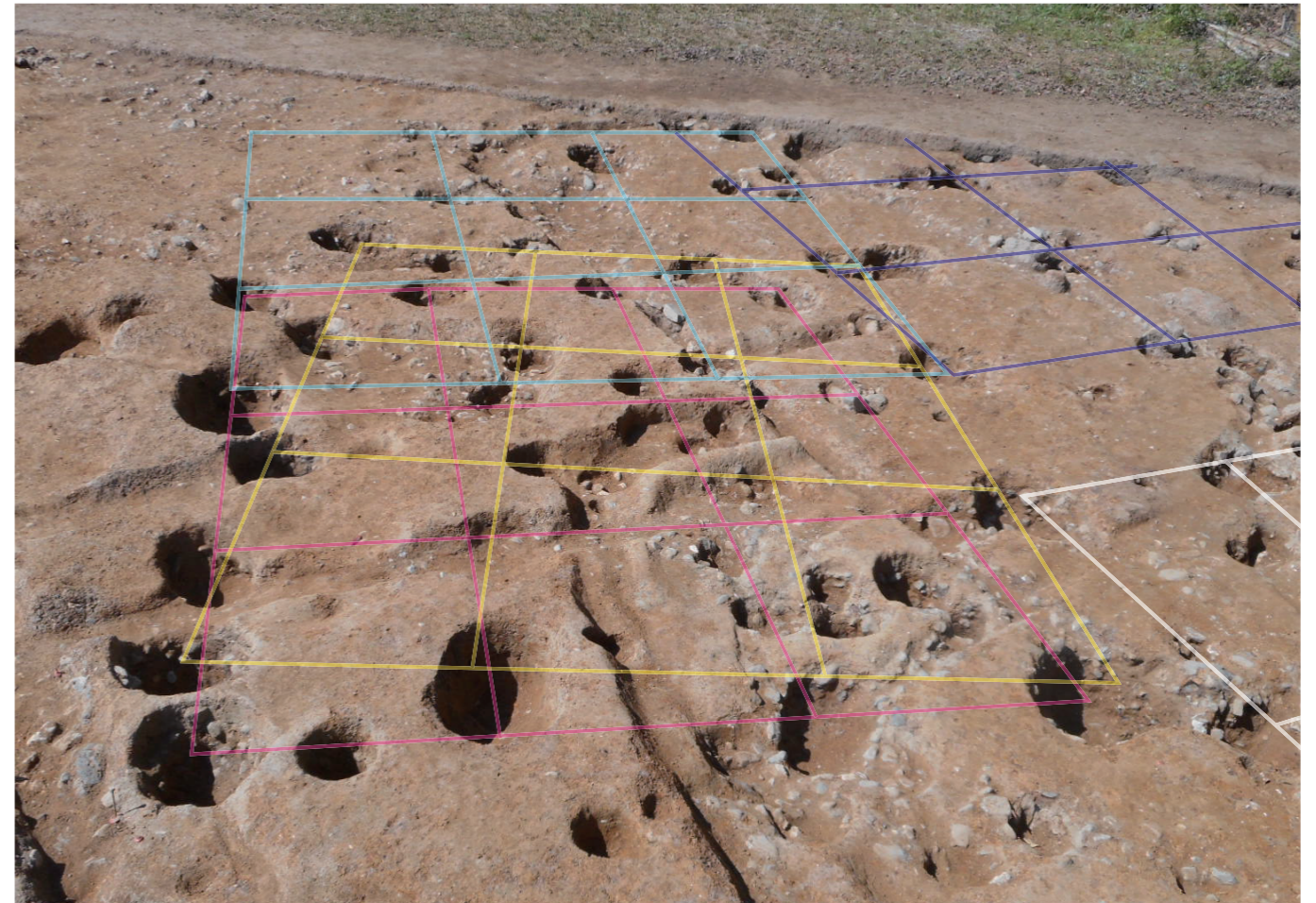
URL <http://www.educity.suzuka.mie.jp/museum/> E-mail [kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp](mailto:kokohakubutsukan@city.suzuka.lg.jp)



## 速報展

# 発掘された鈴鹿2015

2016年3月26日（土）～6月19日（日）



古代の倉庫（掘立柱建物）群（東から）

## 磐城山遺跡（第7-2次、8次） 木田町

7-2次：2月6日～3月18日、8次：6月2日～11月5日

農地改良工事に伴う緊急調査

鈴鹿川左岸の丘陵の上にあります。平成22年度から続けて発掘調査していて、今回で6年目を迎えています。発掘調査した面積は、のべ8,300㎡に及びます。

遺跡の東側の発掘成果から、弥生時代後期（今から1,800年前）と古墳時代後期（1,500年前）の2つの時期の集落跡があることが知られてきました。しかし、昨年度の第7次調査では、古代の直線的な溝が確認され、西側に進むにつれて遺跡の様子に変化がありました。この溝は、まだ全てを確認したわけではありませんが、60数m四方の区画を形成するようです。この内部には、古代の重要な施設があったらと想像しています。

今年はこの区画の北東部分を調査しました。その結果、古代の倉庫がほぼ同じ場所に繰り返して建てられていることを確認しました。7棟を確認しましたが、調査区のさらに西側へ続いており、あと数棟は増えそうな状況です。掘立柱式の総柱建物で、年代は定かではありませんが、飛鳥時代から奈良時代頃（1,300～1,400年前）になりそうです。

鈴鹿の古代豪族である、「大鹿（おおか）」氏の本拠地がこの周辺であることから、大鹿氏の居館などの可能性を考えながら調査を進めています。今後もさらに内部の調査を進めていくので、どんな成果が出るか楽しみしてください。



竪穴住居（SH0879等）完掘（西から）



竪穴住居（SH08103/104）完掘（北西から）

## 十宮古里遺跡 (第5次) 十宮四丁目 6月25日～1月31日 宅地造成工事に伴う緊急調査

鈴鹿川中流域の右岸に位置し、鈴鹿川によって形成された微高地から低地にかけて立地します。標高は10m程度で、周囲には過去に鈴鹿川が何度も氾濫した際の河道が存在するものと考えられます。かつては神戸中学校遺跡と呼ばれていた通り、旧神戸中学校の敷地内を中心とする遺跡で、戦後すぐに行われた校庭の造成時から土器がよく出土することで知られていました。特に、平成5年に行われた第1次調査では、中学校の運動場の一部を調査し、幅約3mの大溝から古墳時代初頭頃の土器が非常に多量に出土し、大きな注目を集めました。また、中世から近世初頭にかけての井戸や土坑が多数検出され、多くの土器や陶器類が出土しています。

今回の調査は中学校の教室及び昇降口、ポンプ室、中庭部分の2,948㎡を対象としました。第1次調査区から北方約80mと近接しています。調査の結果、7世紀代の井戸1基、中世～近世初頭の井戸32基、中世後半～近世初頭の廃棄土坑1基や溝などを確認しました。遺物は土師器羽釜がまとなり、中～近世の陶器なども多く出土しています。残念ながら、期待された大溝の続きは検出できませんでした。大溝の時期には調査区のほぼ全面に河道が走り、これが埋没する鎌倉時代以降、本格的に遺跡が形成されたものと考えられます。地下水位が高いため、積極的に多数の井戸を掘削し、貴重な水資源の獲得に努めていたことが窺われます。粗砂層を基盤とするため、建物を建てるのに適した土地ではなかったと考えられ、具体的な集落の様相は不明です。微高地となる南方にこれらの井戸を活用した集落が存在するのでしょうか。



廃棄土坑



井戸



調査区全景

## 伊奈富神社七島池 (第1次) 稲生西二丁目 7月21日～8月31日 学術調査

伊奈富神社の境内地にある、県指定の名勝庭園「伊奈富神社庭園」の調査です。東西72m×南北18mほどの長方形の池に大小の7つの島が配されています。この池は室町時代の作とされる「勢州稲生村三社絵図」にも描かれているほか、弘法大師が一夜にして作られたという伝説が伝わっています。

近年、腐葉の堆積や土砂の流入によって池の水位が上昇し、それに伴って島の侵食が進んで著しく縮小しつつあることから、保存整備について検討が進められています。それに先立ち、本来の島の規模・築造方法及び年代等を調べるためにトレンチ調査を行うことになりました。

いったん池の水を抜き、岸と島、島と島間の池底に4箇所、そして最大で祠の跡がある島に1箇所、そして西よりの岸に3箇所の計8箇所に試掘溝を入れました。その結果、池部分は素掘り、掘削で出た基盤層の土を盛って島が構築されていることが確認できました。また、大きな島の一部には崩落を防ぐために施された護岸を確認しました。この護岸は後世のものと思われる。

出土遺物は多くありませんが、ロクロ成形の土師器皿・山茶碗・青磁・白磁や常滑焼甕など、主に平安時代末から鎌倉時代にかけての遺物が主にみられました。池は鎌倉時代には築造されていたのではないかと思います。



池の現況



「島2」南岸の護岸施設

## 間瀬口遺跡 (第1次) 木田町 2月1日～5月26日 社会福祉施設建替工事に伴う緊急調査

高岡丘陵の間を流れる波瀬川の左岸に形成された低位段丘上に位置します。後世の削平が著しく出土遺物は少ないものですが、竪穴住居の可能性のあるものを含め7棟、溝2条、土坑、ピット等が確認されました。

河曲の地は壬申の乱に登場する「川曲の坂下」の候補地の一つです。日本書紀によると、672年6月24日に吉野を発った大海人皇子(後の天武天皇)は、翌25日には名張、伊賀を抜けて鈴鹿郡へ入り、川曲の坂下に至って日が暮れたといひます。強行軍のため、川曲の坂下で鸕野讃良(うののさらら)皇女(後の持統天皇)と共に休んでいると、雨が降り出し雷雨となったため、三重郡衙まで移動したと記録されています。川曲の坂下の所在は不明ですが、間瀬口遺跡の一帯である可能性が考えられます。



竪穴住居 (SH0120) 完掘 (東から)

## 宮ノ前遺跡 (第4次) 十宮三丁目

7月1日～8月31日 個人住宅建築に伴う緊急調査

鈴鹿川右岸の低地部に位置します。今回の調査は2次調査で確認された溝SR0202を追うかたちで進めました。

続きである溝SR0402からは7世紀を中心とした土師器や須恵器が多く出土したほか、新たに3条の溝が確認されました。これらの溝は出土した土器から溝SR0402とおよ同時期に西から東へと流れていた河道であったと考えられます。このことは、過去、鈴鹿川の支流がこの地域に幾筋も流れていたことを物語っています。また、溝SR0402と溝SR0403の下層からは弥生後期から古墳時代にかけての土師器とともに大型獣の骨が出土しました。これらは上流から流れてきたもの、ないしは古墳時代以前の遺構を掘り抜いてしまったため出土したと考えられます。



調査区全景 (南西から)



竪穴住居 (SH15) 掘削風景 (北東から)



調査区全景 (南東から)

## 大谷古墳 (第1次) 木田町

6月2日～7月20日 墳丘・主体部確認のための学術調査



大谷古墳は鈴鹿川支流の浪瀬川の左岸、台地の端部に立地します。直径は約40m、高さ5mあまりの巨大な円墳です。墳丘の南半は大きくえぐられ、窪みに収まるように若宮八幡宮が鎮座します。大正時代の改築の際に須恵器や鉄刀、金環が出土した記録があります。主体部は巨石を用いた横穴式石室であつたらしく、石材が石組みや配石に転用されています。

拝殿改築計画に伴い、古墳への影響を調べるため発掘調査を行いました。墳丘西斜面のトレンチでは、大正期の工事の際の須恵器片を含む排土が本来の墳丘盛土上に1m以上堆積していました。墳丘の南半分は近世にすでにテラス状に削平され社殿が建っており、さらに大正期に大量の排土が社殿の両脇に積まれたことにより現在の姿になったようです。



西斜面トレンチ掘削作業